

松尾スズキの『ヘブンズサイン』における自傷行為 そして摂食障害の症状

Wolfgang Zoubek

富山大学人文学部紀要第 60 号抜刷
2014 年 2 月

松尾スズキの『ヘブンズサイン』における自傷行為 そして摂食障害の症状

Wolfgang Zoubek

松尾スズキの演劇作品の中に登場する人物たちはしばしば精神的に病んでいる人として描かれている。舞台には現代日本社会のねじれた状態と不公平によって精神的に傷付けられている若い人たちが登場する。強調して表現するならば、松尾の作品は「病的な社会が病気の人間を作り出している」という社会批判的メッセージを発しているのである。しかし、松尾は道徳的な世界改良家ではない。毒のとげを持つにもかかわらず、彼の書いた作品は観客を笑わせる効果のあるブラック・コメディである。松尾によって描かれている登場人物たちはただ哀れな犠牲者であるだけではなく、またたとえ彼らが一見してアウトサイダーのように見えとしても、支離滅裂になった今日の代表者でもあるのだ。若い観衆は彼らと自分を同一視することができる。このようにして松尾の演劇の世界は、今日の社会の苦悩を悲劇としてではなく、喜劇として反映している。

1998年に初演された松尾スズキの作品『ヘブンズサイン』の中では、特に女性の精神的な問題がテーマ化されている。主人公ユキは自傷行為を行っている。そして彼女の友達のドブスは摂食障害に悩んでいる。二人は精神病院に入れられている。確かにユキの人生がこの作品の中心的テーマではあるが、ドブスはユキの分身として登場している。

自傷行為の定義

自傷行為は今日の社会においては深刻な現象ではあるが、当事者たちの抵抗がしばしば非常に大きいので、その症状を治すのは難しい。これまでになされた研究から我々は、自傷行為は多くの場合トラウマ的経験につながっており、大体思春期に表れるということを知っている (McGilley 2004, 76)。自傷行為の原因によって、その治療方法は非常に異なったものになる。そして当事者と彼らの家族に対し、症状に関する誤解を啓蒙することも重要である。

自傷行為に苦しんでいる人は怒り、悲しさ、孤独を感じた時、またその他の不快な感情を抱いた時に、自らの心の衝動を抑えることができない。そして心的ストレスに落ち込む。自らのストレスを抑えるため、彼らは自分自身に傷害を加える。しかし多くの場合、彼らは「私は抑えられない衝動を感じた」という以外に自らの行為を理性的に説明できないし、意識し

て自分に傷害を加えたことを思い出すことすらできない場合もある。彼らの行為は見かけ上は破壊的であるが、実際は自己防衛である、病的な環境からの自己救済のようで自己治療のようである。なぜなら身体的な苦痛は精神的な苦痛を和らげる効果があるからだ。我々は事情によってはその行為を愛情や優しさの喪失に対する代償行為としても解釈することができる (McGilley 2004, 78)。またはポストトラウマの症状として生き延びる試みであるかもしれない (McGilley 2004, 83)。というのは、自傷行為を行う者は自殺しようとしているのではなく、むしろその反対に、自己傷害によって自己殺害の力をそごうとしていると考えられるからである。しかし自己傷害が自分自身を処罰する意図をもってなされる場合もあるかもしれない (Favaro&Santonastaso 2000, 537)。その自己処罰の意図が強ければ強いほど危なくなる。なぜなら自らの生の願望はたいいていの場合彼らに知られていないので、当事者はしばしば最終的に自分自身の殺害へと導いてしまうような強い死の願望を述べる。それ故、彼らが陥っている危険を理解することが不可欠である。

日本では自傷行為の際にしばしばリストカット（手首を切ること）が行われる。リストカッターの場合、彼らの行為は通常、怒りあるいは不満と、もしくは他の人を攻撃したり物を破壊したりしたいという願望と結びついている。しかし、ストレスの状態を解決するために寧ろ彼らは自分に傷害を加える。彼らは自分の血が流れるのを見ると「生きている」という感覚を持つ。これはマゾヒズムの場合とは異なっている、本人が他者に対して感じている挫折感や不満感を表現できないのだ。それ故、リストカッターの中に我々はしばしば「日本の美徳」の性格を持った人を見つける。¹⁾ 自傷行為はこの意味において一種の失敗した反乱あるいは強制からの見かけ上の解放と見られる (McGilley 2004, 79)。というのは表面的には、この日本の美徳は社会の調和の維持に役立っているからだ。例えば紛争はこのようにして回避される。しかし、裏を返せば日本人は多くの場合に本当の意図や感情をもはや誠実に伝えることができないということにもなる。そしてこれが事実であるならば、最悪の場合には心身症や精神障害を引き起こすこともある。

摂食障害の定義

一般的に我々は過食症や拒食症を指して摂食障害と言う。しかし、本来摂食障害は次の3つのカテゴリー、すなわち、Ⅰ) 多食症あるいはむちゃ食い症 (Binge eating)、Ⅱ) 過食嘔吐あるいは神経性大食症 (Bulimia nervosa)、Ⅲ) 拒食症あるいは神経性無食欲症 (Anorexia nervosa) に細分される。20世紀の後半以来、主に工業国で摂食障害の症状が若い女性の間に

1) [http://ja.wikipedia.org/wiki/ リストカット](http://ja.wikipedia.org/wiki/リストカット)

広がり始めた。しかし近年では、摂食障害の症状に悩む若い男性も増加している。自傷障害の場合と同様に、摂食障害の場合もただ一つの原因だけではなく、多くの異なった原因が問題となっている。

女性の場合、自分の体型を理想的体型から著しくかけ離れたものだと思い込み、必要以上に痩せ細った体になりたいと望むことに、摂食障害になる原因があると一般的に考えられている。しかし、自分の肉体に関する認識が誤っている場合も見られる。すなわち、普通の体型ですら、あまりにも太りすぎていると感じられている場合もある。そして、この自分の体への不満足が強制的なダイエットにまでつながるのである。しかし、西洋の国々に比べて日本では肥満症はそれほど広がっていないように見える。また、肥満になりはしないかという不安もそれほど決定的に表立ってはいないように見える。それでも西洋においてと同様、日本においても摂食障害は増えている。それ故、おそらくこれに対してはまだほかに説得的な理由があるのだろう。理想の体型を現実化したいというのはただの願望ではなくて、自己の人格の理想でもある。完全な社会的役割の遂行は願わしいことであり、自分を強いプレッシャーの下へ置くことにつながる。これが摂食障害のさらなる本質的な理由のように見える（Pike 2005,27）。

ありきたりの偏見とは違って、摂食障害の原因たりうるのは、痩せた身体へのあこがれだけではなく、その背後には自分を精神的にコントロールし続けたいという意図も隠れていると言える。当事者にとってはセルフコントロールは独立していること、自分の足で立っていることの象徴である。それ故、もし彼らがセルフコントロールを実行できれば、それは彼らにとって自分が自立していると感じられることを意味している。しかし、ダイエットが失敗した時、もし食欲を制限することに成功しなかった時、それは彼らにとってセルフコントロールの喪失を意味する。彼らはそれを恥じ、それは彼らの生活感情を不安にする。そしてそれは自己嫌悪にまでなりうる。

多食症あるいはむちゃ食い症（Binge eating）

文字通り、本人はときおり食発作に襲われて、その時我慢できずに食物なら何でものみ込む。多くの場合、むちゃ食い症にかかっている者はそのために必要な食糧を秘かに用意する。

過食嘔吐あるいは神経性大食症（Bulimia nervosa）

過食嘔吐はある意味で多食症に似ているが、本人は食べすぎを後悔し、下剤、利尿剤や薬物などを使用してカロリーを強引に減らすつもりで嘔吐する。また、過激なダイエットや激しい運動などもおこなう。神経性大食症に悩んでいる者は多くの場合にアンビバレンス（両価感情）

を抱え込んでおり、感情や行動は極端から極端に走る。その考え方は絶対的であり、何事に関しても白黒をはっきりさせたがる価値観を持つ。つまり彼らにとっては善と悪の間に何もないのである。到達できない完璧さを狙っているが、食発作で過食してしまった場合は自身に対して自責感、敗北感などを持ち、自己評価も低下させる。

退食症あるいは神経性無食欲症 (Anorexia nervosa)

退食症は強い精神的な障害で、自傷行為と同じように最終的に死に到ることもある。神経性大食症との共通点は、患者が身体的な美しさに関して理想を目指して、強い痩せ願望を抱いているということである。しかし、神経性大食症の患者と違って、退食症の患者は食欲をより根本的に抑圧する傾向がある。その不健康な食行動や栄養不足は心理的にも身体的にも障害をもたらす。例えば欠乏症状、不整脈、循環障害、腎臓損、睡眠と神経の集中障害が起こる可能性がある。女性の場合には月経が起こらず、自分の身体に対しての不満から、女らしさや性欲を一般的に拒否することもある。心理的な結果として退食症はうつ病、パニック障害、パーソナリティ障害などをもたらす可能性もある。²⁾

松尾スズキの略歴

松尾スズキは1962年に九州で生まれ、作家、演出家や俳優として活躍し、海外でも日本映画や現代演劇の代表として知られている。大学卒業後上京し、1988年に東京で劇団「大人計画」を創立して、小劇場演劇界でスタートを切った。その後、様々な上演活動で観客を増やし、人気を得て、1990年代の後半には自分のスタイルを見つけた。そして、1997年に『ファンキー！宇宙は見える所までしかない』で第41回岸田國士戯曲賞を受けた。この作品で「大人計画」は日本の小劇場演劇を代表する一つの劇団になったといえる。

2004年、松尾スズキの映画監督デビュー映画『恋の門』はヴェネツィア国際映画祭に出品された。『マシーン日記』のドイツ語版は2005年にベルリンの劇場 (Schaubühne am Lehniner Platz) においてリーディングで紹介され、そして2006年、リンツ (オーストリア) の劇場においても上演された。2013年にはパリでも同作品が日本語で客演されている。

松尾は漫画原作者や小説作家としても活動している。2006年に『クワイエットルームにようこそ』で第134回芥川賞候補となり、2007年に松尾はその原作を自身が監督・脚本を担当して映画化した。2008年に映画『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』の脚本で第31

2) http://de.wikipedia.org/wiki/Anorexia_nervosa

回日本アカデミー賞最優秀脚本賞を受けた。そして2010年には『老人賭博』が再度芥川賞候補作となった。

松尾スズキのテーマ

日本演劇界において松尾の戯曲はユニークであり、彼の残酷な喜劇はブラックジョークに満ちていて、人間の残虐性を舞台に常に苦笑いを引き起こす。上述したように松尾は主に腐敗の世界をグロテスクに諷刺的に題材にし、彼の描いた主人公の多くは苛め、差別、セクハラなどのために心理的または身体的に悩んでいる。³⁾

松尾が描写する現代社会の状況は一見して戯画化されているように見えるが、実は思いがけなく現実に近いと言える。表面的には日本社会は平和的、調和的に見えるが、昔から深く根を下ろしている権威主義や差別への傾向がまだある。松尾スズキはそのことを暴露する。批評家内野によると松尾は「その根底にある意識として『人と人は理解できる。だから、話し合おう』といった戦後民主主義的な『了解可能性』への深い懷疑を感じ」ている（松尾/内野2003, 91）。

松尾スズキの描く若者の主人公は上述したようによく苛められて、傷つけられて、心理的もしくは肉体的に悩んでいるが、支配的なテーマはそれに関する罪と罰の問題である。松尾の主人公の多くは罪責感を抱いているが、多くの場合に罪と罰の問題は逆にされたように見える。例えば、加害者は無意識に罰を求めているようであるし、また被害者は受けた被害を罰として認めているようなのである。松尾スズキの作品では誰が有罪か誰が無罪か、それについてははっきりした答えがなく、主人公は皆ある意味で有罪であるようなのだ。

例えば、『悪霊・下女の恋』の中では一人の若い男性が事故に遭ってから車椅子に縛られている。彼の障害は治る可能性があるが、治りはしない。なぜなら彼は、子供の時に悪いことをしてしまったという意識を大人になってからも引き摺っており、事故はその罰が当たったものと思ひ込んで、車椅子から立ち上がろうとしないからだ。彼は妻が友人に寝とられても抵抗せずに罰として受け入れる。

他の例を挙げよう。『マシーン日記』の中では、ミチオという若い男がサチコという女の子を犯した。その後、ミチオの兄アキトシは弟ミチオの足を罰として鎖でミチオが住んでいるプレハブハウスの中で縛る。そして、アキトシはミチオの代わりに償いとしてサチコと結婚する。しかし、それはサチコにとって幸せな生活にならない。彼女はアキトシにドメスティックバイオレンスを受けるのだ。そのためサチコはミチオと一緒に逃げようとする。ミチオを自由にす

3) [http://ja.wikipedia.org/wiki/ 松尾スズキ](http://ja.wikipedia.org/wiki/松尾スズキ)

るために、彼女は斧で鎖を切ろうとするが、過ってミチオの足を切ってしまう。その結果、ミチオは完全な身体障害者になるが、永遠に被害者だという意識をもつサチコは加害者として、ミチオの新しい恋人に殺される。このように、罪と罰の問題は最初から最後まで入れ替わり続ける。

『ヘブンズサイン』

『ファンキー！宇宙は見える所までしかない』で岸田國士戯曲賞を受けてから、『ヘブンズサイン』は松尾が次の年に初演した戯曲である。その戯曲は『マシーン日記』（1996）と並んで松尾の90年代の代表作品だと言える。『ヘブンズサイン』の中でも加害者と被害者との入れ替わりが見られる。ユキという女の子は主役で、彼女はブログで「精神病院上がりの殺し屋」を名乗る（75頁）。ユキは猫を虐待したり、殺したりしたので精神病院に入院させられたが、退院してからも通院中であり、抗鬱剤が欠かせない。自分のブログで「ハタチの誕生日、予告どおり私はこの世から消え去ります」（76頁）と、自殺を図る予告をし、そして「部屋に鍵をかけ包丁で動脈を切ります」（110頁）と、その具体的な方法まで記している。ユキはずっと自傷行為も行っているが、それは彼女の父親にとっても精神的な負担になる。そして、彼にとって彼女の問題がますます重荷になり、娘が二十歳になる前に父親の方が自殺してしまう。それが原因となってユキの計画は変わり、いろいろあったものの、最後は世界が滅亡してユキと彼女のボーイフレンドしか生き残らないという結末を迎える。

『ヘブンズサイン』の中では、ユキの家族とユキの友人の送っている日常生活がグロテスクに描かれている。過食症で悩んでいるドブスと並んでユキの友人は皆精神病院に入院させられている若者達である。足し頭という男は麻薬中毒で、宇宙人と呼ばれている男は自分は宇宙人だという妄想に取り憑かれている。もう一人、背広という男はいつも背広を前後逆に着ている。彼はそれが就職できない理由であると主張しているが、実はそれは言い訳で、彼は就職したくないのだ。

様々なエピソードがあるが、戯曲の中で主として描かれるのはユキの精神障害である。彼女の問題が手短かに女性雑誌にスクープされる。「女子大生三十三匹猫殺しの狂気！町中の飼猫を殺し自殺未遂した十九歳の美人美大生、真相は謎のまま！父一人、子一人の訳あり家庭！」（15頁）。

ユキの父親は娘の異常な行動のため近隣の人たちに嫌われ、悔悟の色を見せながら、町中で一軒一軒を回って上下座して謝らなければならない（松尾 1998, 15）。しかし、本当に頭がおかしいのは、ユキや精神病院に入院している彼女の友人たちではなく、その近隣の人々、つまり一般的常識人を演じている人々の方なのだ。例えば隣人の山田夫婦はいい人のふりをしてい

るが、恨みと怒り、強い不満を隠し抱いて生活を送っている。山田家の夫は妻の流産さえも全く関係のないユキのせいにした。残念なことに、ユキの父親には山田夫婦のような表面的な親切さと内面に隠した恨みを持った人々に対応する能力が備わっていない。

ユキの伯父も変った人である。一人暮らしをして、一般的な市民のふりをしているが、実は少女のころのユキを性的に虐待し強姦したのである。ユキの父親はそれを漠然と感じてはいたが、結局兄の行動を看過した。

しかし、ユキを一番大きく傷つけたのは母親の家出であった。父親にとってたった一人で娘の教育をしていくことは荷が重すぎた。ユキは自分のブログでトラウマ的な経験を次のように書いている。「私が生まれて、お母さんは出ていった。お父さんの孤独は私のせい。私とこのことがばれて、伯父さんは、奥さんに逃げられた。伯父さんの孤独も、私のせい。ある日、やけになって薬を飲んで、町中を恐怖のどん底にたたき込んだ。……私のせい」（120頁）。ユキは幼いころから被害者であるにも拘らず、無意識にすべてが自分の責任という罪責感と加害者意識をもっている。

松尾スズキはこのように第一幕でユキの精神障害を悲喜劇的に描いているが、第二幕は日本の現代社会についての不条理劇のような諷刺的なものとなっている。第二幕の中でユキは変わったセラピーを受けているが、それによってユキが子供の時から体験していた日常の狂気も明らかになる。このような体験を経た子供は心理的に安定した健康な大人になるのは不可能であろう。

このセラピーではユキの生母の代わりにマーサ内藤という女性が登場する。彼女は、関東ベビーシッタープロの会からやってきた。ユキの父親は死ぬ前にユキをちゃんと育てることがができる仮の母親を依頼していたのだ。しかし彼は、ユキはもう子供ではなく、すでに二十歳になるということをマーサには伝えていなかった。

マーサは体中に包帯を巻き、満身創痍の姿で登場する。マーサによると最近交通事故に遭ったそうであるが、ある意味で、いつも手首に包帯しているユキのグロテスクな分身としても見られる（松尾1998, 116）。

マーサが指導するセラピーは変ったロールプレイである。母親役を演じるマーサは主婦として自分で栽培して掘ってきた山芋を手にとって、手作り野菜の大切さを強調するが、すぐ父親役を演じる背広との夫婦喧嘩になる。ちなみにユキの生母は駆け落ちしてから、ラーメン屋を始めた。そこに母親、料理そして食事との関係が歪んだ形で取り上げられている。また、ユキの分身であるドブスの問題への当てこすりとしても解釈できる。

ただ肉体的な欲求に制限され、心理的な発達をおろそかにした教育の抱える欠点への当てこすりは他にもある。精神病院の医者が暇でタマゴッチのようなゲームで遊んでは何度も失敗し、タマゴッチが死んでしまうというシーンがある。そのシーンは、食べものを与えるだけでは子

育てにはならないというメッセージが含まれている。

松尾スズキの描写した食行動

『ヘブンズサイン』の中では二つの異なった精神障害が取り上げられている。ひとつはユキの自傷行為であるが、もうひとつはドブスの摂食障害である。ド布斯は過食症のため精神病院に入院していた。ド布斯の問題は、彼女が時々突然、食食欲に襲われて、手当たりしだい目に付く食物を全てむちゃ食いしてから、食べたものを吐いてしまうことだ。『ヘブンズサイン』の第二幕では、ド布斯はユキと同じように退院しても相変わらず神経性大食症で悩んでおり、食欲を自制することができずに、捨てられた食物さえも食べてしまう。彼女は食べたり、吐いたりを常に繰り返し、過食と吐発作の悪循環を断ち切ることができない。ド布斯は人目のつかないところに自らの吐瀉物が入ったビニール袋を隠していたが、それが見つかってしまうと、それは吐いたものではない、嘔み出したものだからまだ食べられるのだと主張するのだ（松尾 1998, 129）。

ド布斯が自分の体重を心配しても、それはただ痩せ細った体型を望んでいることを示しているだけではない。すでに上述したように、摂食障害者の主な意図は自制、つまりセルフコントロールすることであり、その場合、食欲を抑えることは一番重要な目的である。しかし、ド布斯はその自制ができず、食欲を抑えることに何度も失敗を繰り返し、それはますます精神的な不安定を引き起こす。

『ヘブンズサイン』の中では何度もマナーの悪い食事シーンが見られるが、松尾の作品『マシン日記』の中でも舞台上で演じられる食行動には社会的な秩序と無秩序を象徴的に表現する機能がある。例えば、ミチオの食べるものは常に不健康で、食べ方は汚く不潔である（松尾 2001, 10）。それに対してアキトシは健康でおいしい料理だけではなく、行儀良く食事することも大切に（松尾 2001, 14）。このふたりの兄弟は日本社会の象徴として登場している。ミチオは社会的な習慣を無視し、自制できない衝動的な人間として、他方アキトシは、社会的な習慣を大切にし、自制できる理性的な人間として現れているのである。

『ヘブンズサイン』における混乱に満ちた世界の中でも、摂食障害、不健康でマナーのない食事は社会の不安と無秩序を象徴していると言える。言い換えれば、摂食障害は自傷行為と共に社会に対する無意識の反抗や拒否の態度として見られるわけである。

フェミニストの目から見た自傷行為と摂食障害

自傷行為と摂食障害は若い女性に該当するケースが多いので、これらの精神障害については

様々なフェミニズム研究者によってこれまでも調査がなされている。例えば、ある学説によれば、女性たちの存在は社会で昔から主に身体によって認識されているので、女性たちは自分の身体に特に考慮を払う（McGilly 2004, 76）。美人は悩まなければならないという諺もあり、そのときどきの流行りに相当する女らしさ、美しさ、魅力のために女性たちは多くの場合に不便や痛みさえもやむを得ないとする。しかし、精神障害の場合、美人は悩まなければならないという諺が特別な意味を持つようになる。

若い日本学者ハンセンによると、日本社会は昔から現代にかけて女性たちに強い自制力を求めている。その自制力は主に家族のために犠牲になるという美德であるが、その自制を示す一例は食欲を抑えることだから、小さな口は昔から日本の女らしさを象徴する、というのだ。ハンセンによると、日本の伝説に出てくる大きな口で何でも貪り食ってしまう山姥も彼女の主張を支える傍証として挙げられる。ハンセンは日本の文学、マンガや映画に基づいて女性に対する日本社会の態度を分析した。その結果、現代の女性は古代の女性より強いプレッシャーにさらされているということがわかった。なぜなら、現代の女性は伝統的な女らしさと現代の生き方を両立させなければならないからである。しかし、そのような要求に応えるのは容易なことではなく、多くの場合に若い女性たちの精神的な悩みを引き起こすことになる。ハンセンは「文化的・歴史的に構築されたフェミニニティと社会的疎外への怖れを要因として、日本女性の生き方は、一方で過度にフェミニニティに加担しながら、他方では規範的な『女らしさ』に組み入れられることから逃れようとするという逆説的なあり方を示している」（Hansen 2011, 50）と結論づけている。

ハンセンの主張に類似した学説を、心理学者パイクも発表している。パイク博士によると、日本の若い女性たちは現代の自由さを楽しんでいても、女性の伝統的な役割、つまり結婚、子供の出産、専業主婦の生活を根本的に拒否しないのである。しかし、彼女らは少女のころから、将来的には妻となり母親となることを理屈としては承諾していても、周囲から結婚や出産を迫られると、母親の負担を負うことに無意識に抵抗し、少女の生活を出来るだけ長く延長したがる。パイク博士の調査の結果によると、摂食障害で悩んでいる未婚あるいは既婚の若い女性たちは両者とも類似した症状を見せているそうである。彼女らは肥満に怯えることの代わりにキュートな少女の体型に憧れ、無意識に心配事のない少女時代に戻りたいと思っている。その結果、逆説的な幻想が見られ、若い女性は社会的なプレッシャー、つまり結婚や出産を避けるため、自分に対して、激しいダイエットや拒食などの個人的なプレッシャーを与えることになる。

ユキはどのような点で典型的な自傷行為者と言えるのか

ユキは典型的な精神障害者として描写されている。彼女は父親に対して苦情や文句を何ひとつ言わないが、実は父親に強い不満を感じている。彼女のやっていることは全て父親に対する遠回しの行動で、父親を悩ませるための攻撃として解釈できる。猫の虐待や猫殺しを除いて、ユキのやり方は典型的なリストカッターのそれだといえる。しかし、猫の虐待や猫殺しというユキの行為も父親に対しての強い批判、そして罰に当たるような行動と解釈できる。なぜなら、ユキの父親は化粧品メーカに勤めており、会社で実験ウサギの目に目が見えなくなるまで化粧水を注ぐ仕事をしなければならないからだ。ユキはそれについての批判を直接に父親に伝えてはいないが、彼女の恨みは第二幕で明らかになる。ユキにとっては父親の兎虐待と自分の猫虐待とは区別なく同じことであるが、父親は人々に精神障害者としてみなされていない（松尾1998, 78）。

ユキは父親に対してよりも家出した母親に対して不満があるが、生母がいないのでその不満を伝える機会がない。マーサに対するユキの態度はかなり批判的だと言える。第二幕に登場するユキの母らしき人物は、わがままで遠慮や責任を知らない者として描かれている。そして、その二人の母親ともユキは自己と同一視することができない。その二人はユキには良い女性としての手本ではないので、ユキは女性として自分の生き方を探せないのだ。ユキの人生は今まで母親に支援されずに父親や伯父に支配されていたが、その二人の男性はユキをオブジェ（つまりかわいい娘や性欲の対象）として扱っており、ユキは女性として自分の道を発展させられなかった。それらが彼女のジレンマとなり彼女を奇行に走らせたのだろう。完全にわがままな子としてか、もしくは男の言いなりになるオブジェとして生きる以外に、ユキに見える未来の道はないのだ。

ドブスはどのような摂食障害者なのか

一般的な摂食障害者は自分の問題を恥ずかしく思い、周囲に隠して自分の社会的な役割をできるだけ完璧に演じようと努力する。そして、むちゃ食い発作に襲われ挫折した場合には、自分に対して嫌気を感じてしまう。しかし、ドブスは友人の前で自分の問題を隠さず、また羞恥心も見せずに、恥しらずの態度をとっており、自分のむちゃ食いについて冗談めかした話をし、笑いものにされることを認めている。その点でドブスは典型的な摂食障害者ではないと言える。むちゃ食い障害に悩んでいる者は自分の食発作が他人にばれないように、秘かに消化しやすい食物を準備しておくものだが、ドブスはそういう準備をせずに、食発作に襲われたら、友人が持っている食物などを食べてしまう。ドブスは典型的な摂食障害者としては描写されていない。

さらにドブスの個人的な背景や家族などについて、そして彼女の摂食障害の原因について

観衆は何も知らされることがなくとも、一見しただけで彼女がただの常習的空腹の道化者であることはわかる。しかし、ドブスをユキの分身として見るとその問題の原因が鮮明になる。自傷行為と神経性大食症、この両方の精神障害はつながっている場合もあるのだ (Favaro & Santonastaso 2000, 537)。そして演劇や小説の作家はよく精神障害の登場人物の性格を分けて、象徴的にもう一人のアルターエゴを登場させることがある (Hansen 2011, 56)。松尾は『クワイエットルームにようこそ』においても摂食障害の問題を主人公の代わりに脇役の行動でテーマ化した。

ドブスはユキと同じように少女でも成人でもない年齢だ。彼女らは社会習慣に従えば、将来結婚をして主婦になり、子供を産み育てる生活に入る。パイク博士によると日本の若い女性はこの年齢が人生の岐路となる。ドブスは男にまだ興味をもたないが、ユキの場合はボーイフレンド足し頭とは友人関係から性的な関係に変わり、結局妊娠した。自分の生き方の指針も立っていないのに母になることは彼女にとって難しい状況である。日本では婚前交渉で子供ができることは社会的に容認されていて、この婚前交渉でできた子供達のおかげで人口減少が食い止められ、世界を救っていると考えている人もいる。しかし、松尾スズキの諷刺劇『ヘブンズサイン』の結末では、ユキと足し頭はアダムとイブのように新人類の両親と位置づけられ人類の滅亡を促進させる。

『ヘブンズサイン』の解釈の試み

松尾スズキの演劇世界では慣習的な日本社会がよく嘲笑されている。例えば、『マシーン日記』に出てくるアキトシは典型的な日本の父親像のパロディーのように見える。彼の目指している調和的な家族生活は実は悪夢のようである。『ヘブンズサイン』で登場する父親（ユキの父）はアキトシとは違う父親のタイプでありながら、彼も調和的な人間関係を作りたがる。が、松尾スズキの演劇世界では日本社会の代表たちが求めている調和は偽物であり、皆が本当の気持ちを抑えて、嘘の笑顔で幸せなふりをしなければならない。

松尾スズキの戯曲に登場する若者の主人公はそういう偽りの調和に対して抗っている。しかし、それはあからさまな抵抗ではなく、間接的な抵抗である。例えば、松尾作品に登場する若者たちは下品で行儀が悪く、舞台上でゲップをしたり、オナラをしたり、吐いたりするのである。

さらに松尾スズキの戯曲の中では嫌悪感を催させる食行動が何度も見られる。ドブスの食べ方のみならず、すでに上述したように『マシーン日記』の中でも食行動が象徴的な役割を演じているが、健康なおいしい食物ときれいな食べ方はいい家族を象徴するが、最終的にアキトシの目指していた理想的な家族生活は残酷に破壊される。

それは『ヘブンズサイン』との大きな共通点であり、もし家族が互いに理解せず、皆ただ習

慣的に良い人のふりをすれば理想的な家族生活はただの幻想にとどまる。『マシーン日記』の
アキトシは妻サチコを叱って、彼女が作った「くそ貧乏らしい」朝食に対して強い口調で、「朝
飯ってものは、おまえ、それに対する、妻の批評活動じゃないか」と言っている（松尾2001,
56）。そして『ヘブンズサイン』に出てくるマーサのセリフは「大切なのは環境。いい父親、
いい母親。いい先生、いい友達。いい恋人、いい隣人」（松尾1998, 117）だ。しかし、ユキに
はそういう環境が欠けており、そのためいい人にはなれなかった。

結論として、演劇批評家内野が松尾スズキとのインタビューで発言したことを引用しよう：
「『いい子』でいることとかさまざまな社会的な役割を幼い頃から強制されてきた『いい子』た
ちが、それで世界がむちゃくちゃになってしまうにせよ『欲望、あるだろ？認めろよ』という
キャラクターが乱舞する松尾さんの舞台に惹きつけられているような気がします。」（松尾/内
野2003, 94）。松尾スズキの演劇の観衆も皆そういう体験をしたことがあるのだろう。舞台上
で世界をむちゃくちゃにする「いい子」の行動と自分とをリンクさせることで、彼らは、日常
生活で常に感じている日本社会のプレッシャーを緩めるはけ口としているのではないか。

参考文献

- 松尾スズキ：ヘブンズサイン 白水社 東京1998
松尾スズキ：マシーン日記/悪霊 白水社 東京2001
松尾スズキ/内野儀：「『大人計画』の世界性をめぐって」In: ユリイカ特集松尾スズキ2月臨時増刊号
青土社2003 p. 88-99
Favaro, Angela & Santonastaso, Paolo: "Self-injurious behaviors in anorexia nervosa." In: Journal of
nervous and mental disease 188, 2000 p. 537-542
Hansen, Gitte Marianne: "Eating disorders and self-harm in Japanese culture and cultural expressions."
In: Contemporary Japan: Journal of the German Institute for Japanese Studies Tokyo 2011 p. 49-69
McGilley, Berth H.: "Feminist perspectives on self-harm behavior and eating disorders." In: John L.
Levitt, Randy A. Sansone & Leigh Cohn (eds.), Self-harm behavior and eating disorders: Dynamics,
assessment, and treatment. Brunner-Routledge New York 2004 p. 75-89
Pike, Kathleen M. & Mizushima, Hiroko: "The clinical Presentation of Japanese Women with Anorexia
Nervosa and Bulimia Nervosa: A Study of the Eating Disorders Inventory-2" In: International Journal
of Eating Disorders 37, 2005 p. 26-31
<http://www.ab-server.de/>
[http://de.wikipedia.org/wiki/Anorexia nervosa](http://de.wikipedia.org/wiki/Anorexia_nervosa)
<http://de.wikipedia.org/wiki/Bulimie>
[http://ja.wikipedia.org/wiki/ リストカット](http://ja.wikipedia.org/wiki/リストカット)
[http://ja.wikipedia.org/wiki/ 松尾スズキ](http://ja.wikipedia.org/wiki/松尾スズキ)